

# タキシラ探索記

——2023年度のパキスタン現地調査——

## 内 記 理

### はじめに

西北インドのタキシラ（図1）は、古代において商業・交通上の要衝として重要視された土地であった（水谷 1971：114）。紀元前数世紀頃のことと考えられる伝説上の時代を題材とした叙事詩『マハーバーラタ』や『ラーマーヤナ』に、すでに「タクシャシラー」としてその名が現れている（山際 1992：24；中村 2013：389）。初期の仏典には、タキシラが学問都市としての性格も持っていたことが記されるという（Marshall 1951: 43）。紀元前4世紀後半には、アレクサンドロス大王が東征時に「インドス川」と「ヒュダスペス川」の間にある最大の町であるタキシラの首長を臣従させ、訪問している（大牟田 1996：545；593；609等）。続くマウリヤ朝の時代においては「タクシャシラー」は西の重要拠点として重視され、紀元前3世紀半ばの王アショーカが残したアラム語による石柱法勅が見つかっている（山崎 1979：13；40）。紀元後1世紀頃にはアナトリアの町「ティアーナ」出身のアポロニウスなる哲学者が知恵を深めるためにインドへ旅し、タキシラを訪れた、とする伝説も残る（定方 1998：208）。紀元後402年には中国東晋の仏教僧法顕が「竺刹尸羅」国を訪問し（長澤 1996：31）、630年には中国唐の仏教僧玄奘が「呾叉始羅」国で仏跡を訪ねた（桑山 1987：73）。

このように古代史上の記述に連綿と現れるタキシラであったが、その後は長らくの間どこにその土地があったかが分からなくなっていた。19世紀に入り、ヨーロッパの人々が現地を訪れるようになると、タキシラ探索の試みがなされるようになった。そして、19世紀後半にインド考古局のA.カニンガム（Alexander Cunningham）氏が遺跡の集中する一帯を確認し、そこを古代タキ

シラの地に比定した (Cunningham 1871: 111)。20世紀に入ると考古局の J. マーシャル (John Marshall) 氏等によって、その地域に所在する遺跡が集中的に調査された (Marshall 1951; Ghosh 1948 等)。マーシャル氏はまた、唐の仏教僧玄奘が記録に残した都城や仏塔の位置の比定をもおこなった。

イギリス人考古学者達によって19世紀後半に確認され、20世紀以降集中的に調査された「タキシラ遺跡群」は、果たして本当に7世紀に玄奘が見た「呬叉始羅」国の中心地であったのか。これが前稿において筆者が提示した課題である (内記 2022)。「タキシラ遺跡群」を玄奘の記述した「呬叉始羅」国の中心地であったと考えると、地理的な位置関係において大きな齟齬が生じるためである。本稿は、前稿で掲げた課題を解決するためにおこなった2023年度の پاکستانにおける遺跡踏査の結果を報告するものである。以下では、報告に先立ち第1章でタキシラの語源について確認する。また、第2章でタキシラの発見と比定にかかわる研究史を改めて整理し、通説に従う場合にどのような問題が生じるかを確かめた上で、仮説を提示する。第2章で提案する仮説を踏まえ、第3章ではその仮説の有効性の確認を目的として実施した2023年の پاکستانでの遺跡踏査の成果を報告する。

## 第1章 タキシラの語源について

「タキシラ」の語源についてはいくつかの説が示されている (水谷 1971: 114; Salomon 2005: 274)。1つは『ラーマーヤナ』や『マハーバーラタ』といった古代インド叙事詩に現れる登場人物の名前に由来すると考える説であり、もう1つは、サンスクリット語の言葉の意味から考える説である。

『ラーマーヤナ』には父王バーラタによって、タクシャ王子がガンダルヴァの土地に建造されたタクシャシラー都城の王位に、そしてプシュカラ王子がガンダーラの土地に建造されたプシュカラヴァティー都城の王位に、それぞれつけられたことが記される (中村 2013: 389)。一方、『マハーバーラタ』にはタクシャカ (Takṣaka) の名前を持つ竜王が登場するが (山際 1992: 28 等)、この王名を地名の由来と見なす考えがある (Cunningham 1872: 9)。

一方で、サンスクリット語表記の「タクシャシラー (Takṣaśīlā)」の意味か

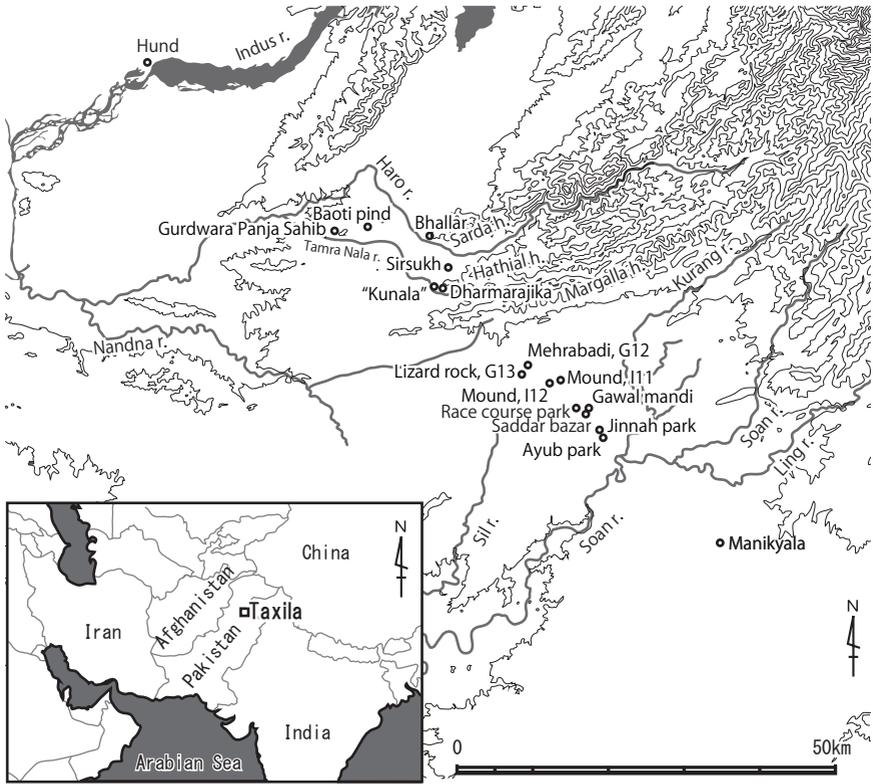


図1 タキシラ周辺の地図 縮尺1/100万（筆者作成）

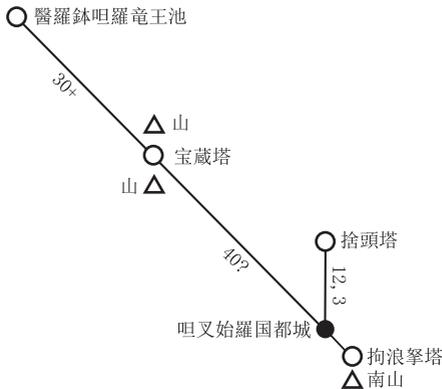


図2 『大唐西域記』に基づいた呾叉始羅の聖跡分布図 数字は里程（筆者作成）

ら説明する考えがある。サンスクリット語の「タクシャ (takṣa)」には「切る」「形作る」の意味があり、「シラー (silā)」には「石」の意味がある。これらを合わせれば、「石切り」といった意味になる。後半部分をサンスクリット語の「シラス (śiras)」(＝「頭」と捉えて、「頭切り」といった意味も生まれたようで、5世紀初頭にタキシラを訪れた中国東晋の仏教僧法顕は、タキシラが「截頭」の意味を持つことを紹介する(長澤 1996: 30-31)。この説明は、『ディヴィヤ・アヴァダーナ』に記される、チャンドラプラバ王がバラモンに求められるままに自身の頭を切って布施する伝説と関わる(平岡 2007: 573-607)。王が頭を布施した王都「バドラシラー」は「タクシャシラー」であることが、物語内で説明される(平岡 2007: 587)。ほかに、サンスクリット語「タクシャシラー」には「トカゲ石」の意味があるとする説も唱えられている(Lüders 1942: 31)。

タキシラの語源にかかわりここで触れておきたいのは、漢訳仏典内でのタキシラの表記である<sup>1)</sup>。漢訳仏典においてタキシラは、「徳叉尸羅」<sup>2)</sup>、「得叉尸羅」<sup>3)</sup>、「得刹尸羅」<sup>4)</sup>、「特叉尸羅」<sup>5)</sup>、「持叉尸羅」<sup>6)</sup>、「特叉尸利」<sup>7)</sup>、「持叉尸利」<sup>8)</sup>、「著叉尸羅」<sup>9)</sup>、「怛刹尸羅」<sup>10)</sup>、「怛叉尸羅」<sup>11)</sup>、「怛叉始羅」<sup>12)</sup>、「咀叉始羅」<sup>13)</sup>、「怛叉尸

- 
- 1) 表記の検索には大正新脩大蔵経テキストデータベースを用いた。<http://21dzk1.u-tokyo.ac.jp/SAT/>(最終閲覧日: 2023年10月30日)
  - 2) 法顕訳『大般涅槃経』(『大正蔵』巻1・200頁c)等。
  - 3) 義浄訳『根本説一切有部毘奈耶』(『大正蔵』巻23・897頁a等)等。
  - 4) 佛陀耶舎・竺佛念訳『四分律』(『大正蔵』巻22・634頁c等)等。
  - 5) 闍那崛多訳『佛本行集経』(『大正蔵』巻3・828頁b等)等。
  - 6) 闍那崛多訳『大威徳陀羅尼経』(『大正蔵』巻21・828頁c)。
  - 7) 慧覺訳『賢愚経』(『大正蔵』巻4・356頁b等)等。
  - 8) 慧覺訳『賢愚経』(『大正蔵』巻4・440頁c)等。
  - 9) 求那跋陀羅訳『雜阿含経』(『大正蔵』巻2・165頁a)等。
  - 10) 求那跋陀羅訳『雜阿含経』(『大正蔵』巻2・254頁c等)。
  - 11) 五百大阿羅漢造・玄奘訳『阿毘達磨大毘婆沙論』巻27・593頁a)等。
  - 12) 慧立本『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』(『大正蔵』巻50・250頁b等)。
  - 13) 玄奘『大唐西域記』(『大正蔵』巻51・882頁b等)等。

羅」<sup>14</sup>、「咀叉始羅」<sup>15</sup>、「卓叉尸羅」<sup>16</sup>、「竺叉尸羅」<sup>17</sup>、「竺刹尸羅」<sup>18</sup>、「多刹尸羅」<sup>19</sup>、「刹尸羅」<sup>20</sup>、「德差伊羅」<sup>21</sup>、「石室」<sup>22</sup>等と記される。ここで注意しておきたいのは「タキシラ」や「タクシャシラー」の音に漢字を当てたとと思われるものが多数を占める中で、最後の「石室」の表記のみ異質である点である<sup>23</sup>。音を当てたものではなく、言葉の意味を漢字で表記しようと試みたものと考えられる。「石室」と表記する仏典には1～2世紀のクシャーン朝の時代にインドで活動した仏教僧の馬鳴（アシュヴァゴーシャ）や、2世紀の後漢時代の中国において仏典の漢訳で活躍した安世高がかかわるものが含まれており、この頃に「タキシラ」に「石室」の意味が認識されていた可能性が高い。

以上より、「タキシラ」ないし「タクシャシラー」の語には、もともとは「石切」、「トカゲ石」、「石室」といった、主に石にかかわる意味があったようであり、「頭切り」の意味にも解釈されたことが分かる。アフガニスタンやインドに比べて、パキスタンにおいては石窟寺院が少ないことが指摘されてきた（水野編 1962：21）。そのような中で、国・城の名前に「石室」の表記がある点は、不可解な点として注意を促しておきたい。

- 
- 14) 龍樹集・日称訳『福蓋正行所集経』（『大正蔵』巻32・741頁c）。
- 15) 湛慧撰『成唯識論述記集成編』（『大正蔵』巻67・179頁a等）等。
- 16) 僧伽婆羅訳『孔雀王呪経』（『大正蔵』巻19・450頁c）。
- 17) 馬鳴造・鳩摩羅什訳『大莊嚴論経』（『大正蔵』巻4・297頁c等）。
- 18) 法顕『高僧法顕伝』（『大正蔵』巻51・858頁b）。
- 19) 闍那崛多訳『大威徳陀羅尼経』（『大正蔵』巻21・828頁c）。
- 20) 元照撰『四分律行事鈔資持記』（『大正蔵』巻40・306頁c）等。
- 21) 支謙訳『佛説滌沙王五願経』（『大正蔵』巻14・779頁a）等。
- 22) 安世高訳『阿那邠邸化七子経』（『大正蔵』巻2・862頁b）等。
- 23) 前注22の安世高訳『阿那邠邸化七子経』のほかに、馬鳴造・鳩摩羅什訳『大莊嚴論経』（『大正蔵』巻4・279頁a等）、吉迦夜・曇曜訳『雜寶藏経』（『大正蔵』巻4・483頁b）、竺佛念訳『出曜経』（『大正蔵』巻4・676頁a等）、『分別功德論』（『大正蔵』巻25・40頁b）、曇摩難提訳『阿育王息壤目因縁経』（『大正蔵』巻50・174頁a等）、宝唱等集『経律異相』（『大正蔵』巻53・191頁c・220頁a）において、「石室国」ないし「石室城」についての記載が認められる。「伊羅波多羅」（エーラパットラ）や「捷陀頼」（ガンダーラ）等とのかわりから、本稿で扱うタキシラを指していることが分かる。

## 第2章 タキシラ探索の試みと通説の問題点<sup>24)</sup>

歴史上重要なタキシラがどこにあったかは長い間忘れられていたが、19世紀にイギリスによる植民地支配がインド亜大陸の西北部にまで及ぶようになる過程で、ヨーロッパ人が偉大な先人として追憶するアレクサンドロス大王が版図に加えたタキシラの探索が試みられた。1808年にアフガニスタン王国へ使節として派遣された M. エルフィンストン (Mountstuart Elphinstone) 氏はその帰路において、アレクサンドロスゆかりのタキシラの地を探索し、ラワルピンディ市の南方にあるマーニキヤーラ (Mānikyāla) で仏塔を発見した。そこをタキシラと考えたエルフィンストン氏の見解は、その後の「タキシラ遺跡群」の発見により誤りと判断された。なお、このマーニキヤーラの仏塔が近代ヨーロッパ人によって確認された最初の古代インドの仏塔とされる (Errington & Curtis 2007: 211)。

1861年にイギリスがインド考古局を設置すると、その技官の A. カニングム氏が広くインド亜大陸中の遺跡の確認をおこなった。氏は、遺跡が集中するタムラー・ナーラー川流域のシャー・デリー周辺がタキシラであると考えた。その後、その土地は「タキシラ」と呼び表されるようになった。氏はまた、タキシラの所在地の検討において、タキシラについて比較的詳細な記録を残した玄奘の記述 (図2) を参考にしており、玄奘が記録した仏塔等の地点の比定もおこなった。

玄奘が記録したタキシラの都城や仏教寺院の比定にかかわる決定打を与えたのは、J. マーシャル氏であった。氏は1913年から1934年にかけて「タキシラ遺跡群」で数多くの遺跡の発掘調査を主導し、カニングム氏によるタキシラの比定作業を引き継いだ。氏の検討により、玄奘の記録したタキシラの都城はシルスフ (Sirsukh) 都市址に、「宝蔵塔」はバオーティ・ピンド (Baoti Pind) の仏塔址に、「捨頭塔」はバツラル (Bhallar) 仏塔址に、「拘浪拏塔」はハティアル丘陵上の無名の仏塔址に、それぞれ比定された (図1・2)。最後の無名だった仏塔址は、玄奘の記述に基づいて「クナーラ塔」と命名された。

24) 本章の内容は前稿 (内記 2022) に基づく。詳細は前稿を参照いただきたい。

玄奘が訪問し、記録したタキシラの都城や仏寺について、このマーシャル氏の比定が現在に至るまで多くの研究者によって受け入れられてきた。ところが、筆者はマーシャル氏の比定にいくつかの疑問を抱いたため、前稿でその問題点を整理した（内記 2022）。マーシャル氏の比定に従った場合の問題点の1つは、「タキシラ遺跡群」に所在し、遺跡群の中でも西北インドの中でも、さらにはインド亜大陸全体の中でも屈指の規模をもつダルマラージカーの仏塔址（直径34.5m）が、玄奘が記録した3つの仏寺の中に含まれていないことになる点である<sup>25)</sup>。玄奘が記録した仏寺の中には廃絶していた仏寺も含まれているから（宝蔵塔）、彼のタキシラ訪問時にすでにダルマラージカーが廃絶していたことを理由に記録から漏れたと即断することはできない<sup>26)</sup>。2つめは、方位の問題である。マーシャル氏は「タキシラ遺跡群」の中のシルスフ都市址を玄奘訪問時のタキシラの都城と考え、玄奘が記録した都城からの方位に基づいて、仏寺の比定をおこなった（図1・2）。都城から北西へ推計40里（約17km）余りにあったとされる宝蔵塔をシルスフより西北西約11kmのバオーティ・ピンド塔（直径19.5m）に、都城から北へ12、3里（約5km）にあった捨頭塔をシルスフより北北西約5kmにあるバツラル塔（直径13m）に、それぞれ比定した点については方位の妥当性を認めうるが、最後の、城外南東にあったとされる拘浪拏塔をシルスフより南西約3kmの地点にあったハティアル丘陵上の仏塔（「クナーラ塔」。直径19m未満）に比定した点は、方位の違いから承服しがたい。拘浪拏塔に比定されたハティアル丘陵上の仏塔の東南東約1kmには、先に述べたダルマラージカー大塔がある。仏塔の規模から考えても、巨大なダルマラージカー大塔を差し置いて、近隣に所在した半分ないしそれ以下の規模の仏塔を記録するということは考えがたい。

マーシャル氏によって唱えられ、これまでの多くの研究者によって疑問を抱

25) 桑山正進氏もまた、「不思議なことに、のちにのべる中国の巡歴僧の記録に、タキシラのダルマラージカーとおぼしきものに言及したものはなし」と述べている（桑山1990：30）。

26) マールガラ丘陵の北側斜面から北方を眺めると、ダルマラージカーの巨塔が目に入る。この庄巻の仏塔址（それもまだ土砂によって埋まっていないであろう頃のもの）を、玄奘が見落とすとは思えない。

かれることなく受け入れられてきた通説には、上記に見た複数の問題点がある。この通説に立ち向かうために、前稿では「タキシラ遺跡群」およびその周辺の考古学的な情報を整理し、それに基づいて新しい仮説を提示した。それは、玄奘訪問時のタキシラの中心地を、現在「タキシラ」の名を冠して呼ばれている場所から外すことである。

発掘調査の結果に基づいた考古学的な情報に従えば、ダルマラージカー大塔は玄奘訪問以前にすでに廃絶していた。つまり、大塔は廃絶した寺院として、玄奘に記録された可能性がある。そこで、ダルマラージカー大塔を、玄奘が唯一廃絶していたものとして報告する宝蔵塔にあたと仮定した。ダルマラージカー寺院址はマールガラ丘陵とハティアール丘陵の間に所在しているから、「両山の間」にあったとする玄奘の記録とも一致する。すると、都城はそこから南東へ17km以上行った地点にあったことになる。この場合、都城は南方のマールガラ丘陵を越えて、首都イスラマールバードやラワルピンディ市のあるポトハール高原にあったことになる。

残念ながら、このエリアでは玄奘の時代の遺跡は一つも知られていない。そもそも、遺跡自体がほとんど確認されていない。早くもこの時点で仮説は頓挫したかに見えたが、19世紀半ばにカニンガム氏が残した古い記録を調べると、可能性が残されていることが分かってきた。氏がラワルピンディ市内とその周辺に、いくつかの遺跡が過去に存在したことを報告しているためである。注目すべきは、彼が市の「両側」に所在したと説明する「Thupi」、すなわち丘である。一方は南東にあったものとされるから、もう一方は北西にあったことになろうか。北西にあったものは、市から5マイル（約8km）にあった高さ20フィート（約6m）の長い丘で、南東にあったものは市の中心地に所在した軍宿営地から約3.5kmの場所にあったと推定される丘である。カニンガム氏の時代にはすでに、北西の丘から遺構の痕跡は失われており、南東の丘も消滅していた。また、ラワルピンディ市内においてもいくつかの地点で古代の人々の活動の痕跡が確認された（Cunningham 1872: 151-152）。前稿では、ラワルピンディ市の中心部が玄奘の時代のタキシラの都城で、そこから北西5マイルの丘が捨頭塔、南東にあった丘が拘浪拏塔だったのではないかと推定した。

上記の仮説を検証するためには、現地での遺跡確認の作業が必要であった。現地で確認したい内容は、①ラウルピンディ中心部から北西約5マイル（約8km）の地点、つまり、現在のイスラマーバードのG11～13区、H11～13区、I11～13区辺りに仏塔址が残存するかどうか<sup>27)</sup>、②ラウルピンディ市中心部に都市址が残存するかどうか、③ラウルピンディ市中心部から南東に仏塔址が残存するかどうか、である。

### 第3章 2023年度の遺跡踏査

2023年8月18日金曜日から26日土曜日までのおよそ1週間の日程で、単身でパキスタンへ渡航した<sup>28)</sup>。上述の課題に取り組むため、イスラマーバード市とラウルピンディ市で、遺跡を探索した。以下に、イスラマーバード市内での踏査と、ラウルピンディ市内での踏査の結果を報告する。

#### (1) イスラマーバード市内の踏査

イスラマーバード市内においては、G12区、G13区、I11区、I12区で遺跡の探索をおこなった。以下に、この順に踏査の結果を記す（図1）。

**G12区** G12区において未確認のストゥーパが存在するというインターネット上にあげられた不確かな情報に可能性を求め、G12区のメフラーバーディ（Mehrabādi）と呼ばれる地区で遺跡の探索をおこなった<sup>29)</sup>。これらの情報がネッ

27) ラウルピンディ市の軍宿営地から、直線距離であればG12・H12区の境あたりが北西5マイル（約8km）にあたり、西北西方向に走る幹線道路であるグランド・トランク・ロード（Grand Trunk Road）を経由して北方へ向かうのであればI12区やH13区あたりが5マイルにあたる。

28) 2023年度の遺跡踏査は、パキスタン連邦政府考古学・博物館局（Department of Archaeology and Museums, Federal Government of Pakistan。以下考古局）の全面的な協力のもとに実現した。2019年度におこなったパキスタン渡航時に考古局と相談し、計画していた調査であり、本来はその翌年（2020年）におこなう予定であったが、コロナの影響により延期していた。2023年5月になり日本でコロナによる制限が撤廃されたため、ようやく渡航が実現した。

29) <https://blog.travel-culture.com/2011/08/30/buddhist-site-discovered-in-g-12-islamabad/>（最終閲覧日：2023年10月31日）等。インターネット上に情報をあげた人物の1人と直接連絡を取ることができたが、どれだけ問い合わせても遺跡の所在地にかかわる正確な情報が提供されることはなかった。

ト上にあげられたのは2010年前後である。現地で得た情報によると、その頃の現地には畑作地帯が広がっていたようである。ところが、その後10年余りの間に同地区では違法な土地開発が進み、現在では新築の住宅が軒を連ねている。一般的に、丘があれば重機で削られ、土地は平らに均されてしまうという。地域の一面で、丘らしき土地の起伏を認めたため、周辺を踏査した(図3)<sup>30)</sup>。土地の隆起部分の断面において遺構や文化層は確認できなかったため、ここを遺跡と認定することはできなかったが、その周辺の畑で土器片が散らばっている状況を認めた。表採した土器片の写真と、滞在中に実測することのできた土器片を提示する<sup>31)</sup>(図4、図5-1~7)。図4-1・図5-1は、両面に凸帯をもつ黒色の土器であるが、弧をなさず直線的に伸びる形態であるため、全体形は不明である。他の素焼きの赤色土器片の中には近現代に製作されたものが含まれていると思われるが、口縁部が少し外反して開く鉢(図4-2・図5-2)が「タキシラ遺跡群」のピール・マウンド遺跡第IV期・第V期(紀元前3~1世紀頃)に、口縁部上面が外に向かって平らに開く鉢(図4-9・図5-7)が同遺跡第V期(紀元前2~1世紀頃)に認められる等、紀元前に遡る時期のものと考えられる土器が含まれる(Bahadar Khan et al. 2002: Fig. 31-13, 39-4, 33-7)。同地の周辺における古代の人々の活動の痕跡として、これらの土器片が残されていたと考えられる<sup>32)</sup>。

G13区 G13区のカシュミール高速道路沿いに所在する「トカゲ岩公園(Lizard Rock Park)」を訪問した<sup>33)</sup>。そこには、地表に露出した自然の岩盤があり、あたかもトカゲが頭をもたげているかのように見える(図6、図7)。

30) 訪問地の座標を示す(以下同)。北緯33°39'8.31"、東経72°58'39.54"。

31) 以下では、現地で表採した土器を、西北インドの他遺跡出土の土器と比較し、おおまかな年代を検討する。近隣の「タキシラ遺跡群」内で出土した土器との比較が最も有効であるが、遺跡群の発掘では3世紀以降の土器が十分に報告されていない。そのため、地域は異なるが、3世紀以降の土器についての言及もあるガンダーラ地方のラニガト寺院址の土器研究も援用する。ラニガト寺院址は1980年代に西川幸治氏が率いる日本の調査隊によって発掘調査された仏教寺院址であり、難波洋三氏によって詳細な土器研究がおこなわれている(西川編1994/2011)。西北インドの土器の年代の検討に極めて有用である。

32) G12区ではそのほかに、その東部に「Killar」すなわち「城」として住民に呼び表される場所がある。軍事基地があったとされる広大な丘である(北緯33°39'44.28"、東経72°59'22.95")。ここでも開発が進み、現在は住宅が立ち並ぶ。

33) 北緯33°38'53.68"、東経72°58'28.35"。



図3 イスラマーバード G12区メフラーバーディーの土地の高まり（北より）（筆者撮影）



図4 イスラマーバード G12区メフラーバーディーの土地の高まり周辺表採の土器片  
縮尺1/4（筆者撮影）

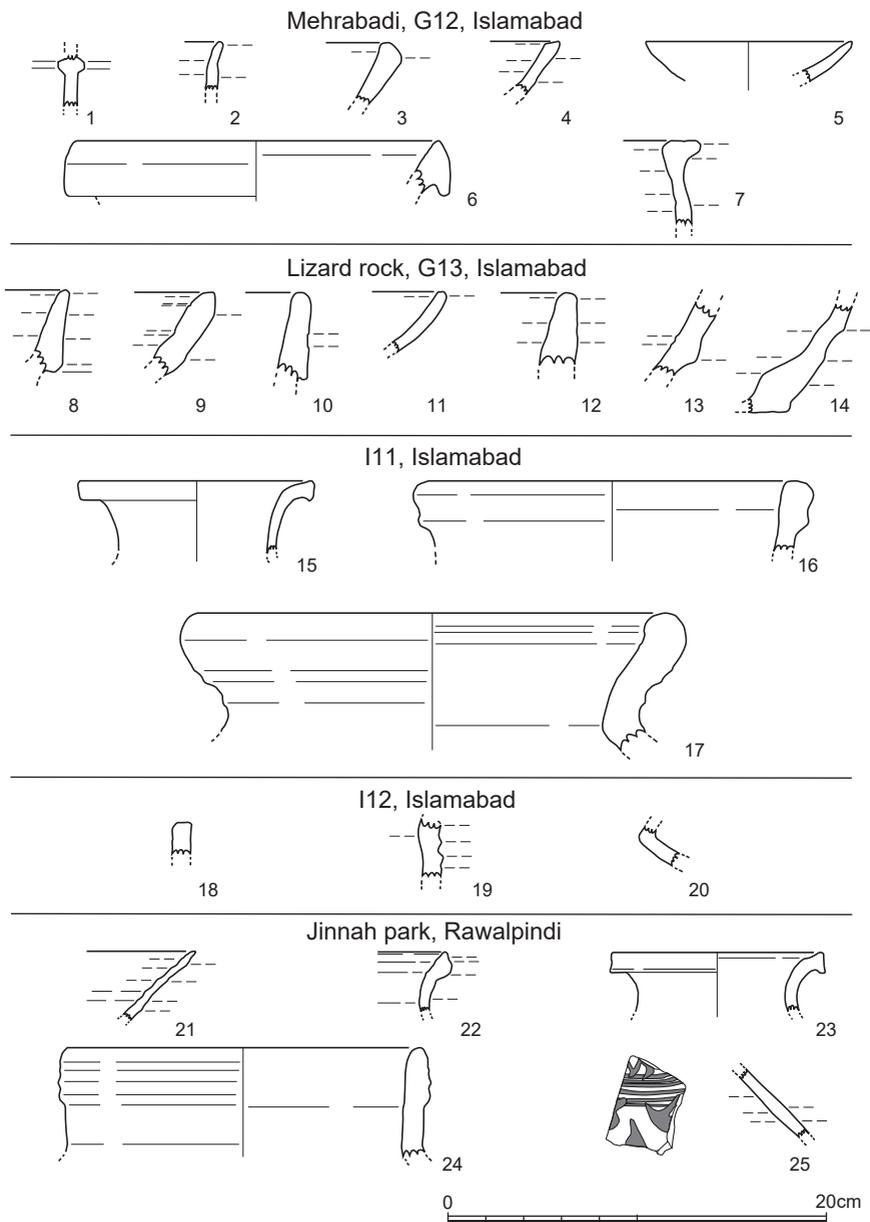


図5 イスラマーバードおよびラワルピンディでの表採土器片 縮尺1/4 (筆者作成)



図6 イスラマーバード G13区のトカゲ岩（南西より）（筆者撮影）

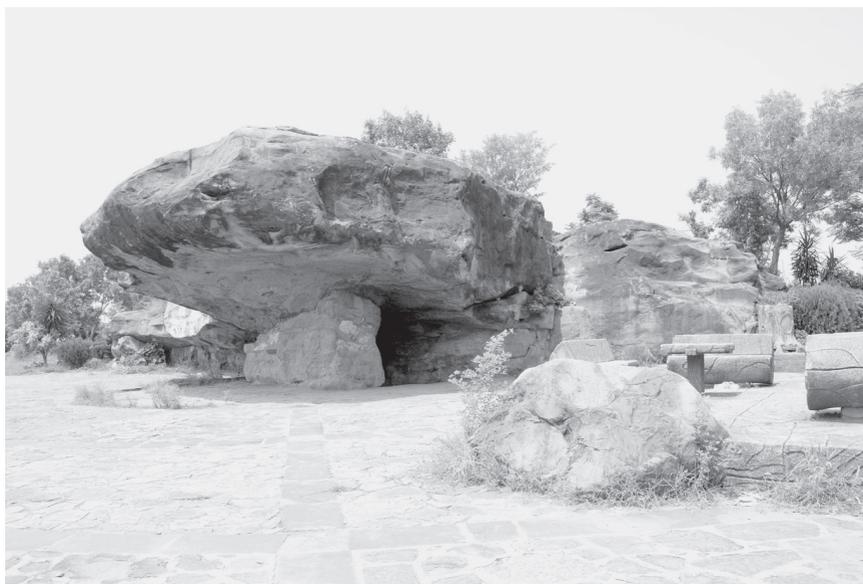


図7 イスラマーバード G13区のトカゲ岩（東より）（筆者撮影）



図8 イスラマーバード G13区のトカゲ岩の小室（北東より）（筆者撮影）



図9 イスラマーバード G13区のトカゲ岩の上面（北西より）（筆者撮影）

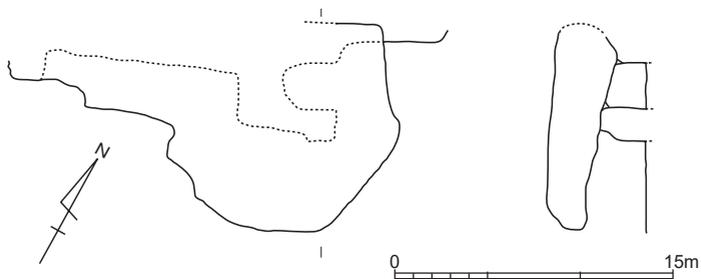


図10 イスラマーバード G13区トカゲ岩の平面・立面のスケッチ 縮尺1/400（筆者作成）

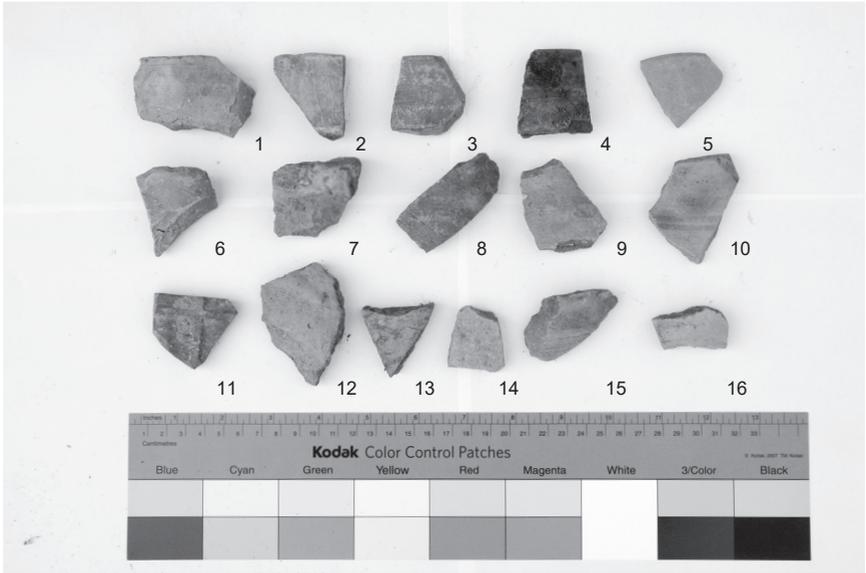


図11 イスラーマーバード G13区のトカゲ岩周辺表採の土器片等(1) 縮尺1/4 (筆者撮影)



図12 イスラーマーバード G13区のトカゲ岩周辺表採の土器片等(2) 縮尺1/4 (筆者撮影)

(一一一)

2010年代になって、首都開発局（Capital Development Authority）が歴史的・考古学的遺跡の保存の見地から、整備をおこなったとされる（Ghafoor 2017: 57）。

巨大な板状の自然の岩を下位にある自然の岩が支える構造を持ち、支え岩の南には天然の屋根をもつ開放的な空間が作られる。また、支え岩には北東側より横穴が開き、こちらは三方に壁を持つ石室のような空間をなす（図7、図8、図10）。岩の上面には、直径4cm前後の円形の穴が14点、2列に彫りくぼめられていた（図9）。このような自然岩の作り出す形状と構造から思い起こされるのは、タキシラに「トカゲ石」や「石室」の意味があったことである。古代の人々の活動の痕跡を探するため岩の周辺で素焼きの土器片等を表採したが、残念ながらそれらのほとんどが近現代に属すると思われるものであった（図5-8～14、図11、図12）。

岩の南方は下り斜面となる。斜面を下りきった先では土器片を全く確認しなかった。南方にある高速道路の建設に伴い、地面が大きく抉られ、周辺の地形も改変されたようである。トカゲ岩の下および周りの地面はコンクリートで舗装されるため、地表の情報を知ることができない。

111区 111区においては、近年新たに遺跡が確認されている。2つの小河川の合流地点にある巨大な丘で、墓石が散在する（図13）<sup>34</sup>。考古局のマフムード・ウル・ハサン（Mahmood-ul-Hassan）博士がイスラマールバード市内を踏査して確認した複数の遺跡のうちの一つのようだが、踏査の報告は公刊されておらず、今後公刊される予定もないようだ。重機によって削られた丘の断面では石積の壁が認められ、また、土器片も多数目視された。考古学遺跡であることは明らかであり、至急の保護が必要とされる。数点の土器を表採した（図5-15～17、図14）。1点の大型壺（図5-16、図14-3）の口縁形態はビール・マウンド遺跡第Ⅲ期（紀元前6～4世紀）のものと同類似し（Bahadar Khan et al. 2002: Fig. 17-16）、もう1点の大型壺（図5-17、図14-5）の形態は、ガンダラ地方のラニガト寺院址第7期（紀元後7～9世紀頃）のものと同類似する（西

34) 北緯33°38'25.00"、東経73°0'55.04"。



図13 イスラマーバード III 区の墓地丘（南東より）（筆者撮影）



図14 イスラマーバード III 区の墓地丘周辺表採の土器片 縮尺1/4（筆者撮影）

川編 2011 : Fig. 9-35-431)。大型鉢 (図14-6) は、「タキシラ遺跡群」のシルカップ遺跡の第1～2期 (紀元前1世紀後半～紀元後1世紀前半) の小穴から出土したものに類似する (Ghosh 1948: Fig. 6-27)。

I12区 I12区でもまた、土地の開発により削られつつある丘を認めたため、周辺を歩いた (図15)<sup>35)</sup>。丘の断面では遺跡の痕跡を認めなかったが、周辺で数点の土器小片を表採した (図5-18～20、図16)。図5-19・図16-6は壺の口縁部片と思われる。外面に3つの溝をもつ形態は、ラニガト寺院址第7期 (紀元後7～9世紀頃) に認められる (西川編 2011 : Fig. 9-34-388等)。図5-20・図16-7は小型壺の頸部であり、内面の上部と外面に赤色のスリップが施される。「く」字形に屈曲する頸部を持つ壺はビール・マウンド遺跡第III期以降に認められるが (Bahadar Khan et al. 2002: Fig. 16-12、22-17等)、スリップが施される例は、シルカップ遺跡の全時期 (紀元前1世紀～紀元後2世紀頃) を通じて存在する (Ghosh 1948: Fig. 9-44)。これらの土器は小片でしかないが、同地で長期に渡り人々が活動した可能性が高いことを示している。

## (2) ラワルピンディ市内の踏査

ラワルピンディ市では、市の中心域と東南部で遺跡の踏査をおこなった。

市の中心域 市の中心域において、いくつかの地点で遺跡の痕跡の有無を探ろうと考えたが、市内には軍事施設が多く、また、地表がコンクリートで覆われていたため、遺跡の存在を確かめること自体に困難がつきまとった。

カニンガム氏によってヒッポストラトス、アゼス、アポロドトスの貨幣が見つかった場所と記録される「旧練兵場 (the old parade)」 (Cunningham 1872: 152) は、現在の「レースコース公園 (race course park)」とされる<sup>36)</sup>。軍隊の所管であり、また、訪問時に閉園していたため、立ち入って土器片等の遺物の散布の有無の確認をすることはできなかった。敷地内には緑地が広がっており、仮に遺跡が残されているとしたら、保存状況は悪くないと思われる。カニ

35) 北緯33°38'11.36"、東経73°0'4.52"。現在はアフガニスタン人移民の住所となっており、生活環境は著しく悪い。

36) 北緯33°36'23.12"、東経73°2'4.24"。



図15 イスラマーバード II2区の丘（北より）（筆者撮影）

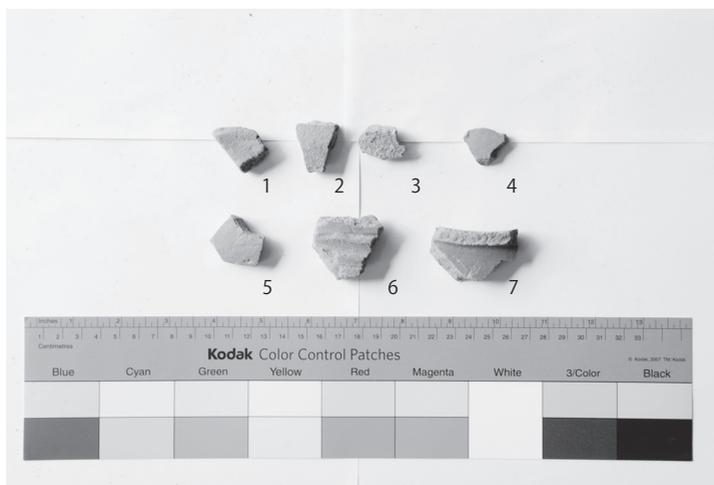


図16 イスラマーバード II2区の丘周辺表採の土器片 縮尺1/4（筆者撮影）

ンガム氏によって土器片が厚く堆積していた場所の一つとして報告される「サッドル・バーザール (Saddar Bāzār)」も訪問したが、現在は店舗が建ち並び、コンクリートが道路を覆っており、地表の情報を読み取ることはできなかった。バーザールの北方の高まりにある「ガウル・マンディ (Gawal Mandi)」と呼ばれる土地も訪れたが、住宅が密集し、道路はコンクリートで覆われていた<sup>37)</sup>。

**アユーブ公園** 市の東南部にあるアユーブ公園内に「Topi Rakh」の地名が見られる。カニンガム氏の記録する「Thupi」(丘)にかかわるのではないかと推察し、公園を管理する軍の許可を得て、兵の案内で広大な敷地内を見て回った。地図上で「Topi Rakh」の表記が認められた一面には、現在結婚式場があるが、周辺を歩いても土器片は認められず、遺跡が存在したとは思われない<sup>38)</sup>。公園内の他の地点も歩いたが、遺跡の痕跡は認められなかった。

**ジンナー公園** アユーブ公園の北北西約1.6kmの地点に、ジンナー公園がある。アユーブ公園のある丘陵から北に下った地点にあり、標高はアユーブ公園の方が高い<sup>39)</sup>。つまり、ジンナー公園はアユーブ公園の丘陵の北陰に所在することになる。ジンナー公園内にある「統一塔 (Unity Tower)」の北東に南北方向に長い長方形に整形された丘があり (図17)<sup>40)</sup>、その東西斜面において、土器片を表採した (図5-21~25、図18)。図5-21・図18-2の小型鉢の口縁部や、図5-22・図18-4の壺の口縁部は、ラニガト寺院址第8期 (紀元後9~12世紀頃)に類例を持つ (西川編 2011: Fig. 9-39-487, 496)。図5-24・図18-7は大形壺の口縁部であり、ビール・マウンド都市址第V期 (紀元前2~1世紀)に類例がある (Bahadar Khan et al. 2002: Fig. 41-7)。図5-25・図18-12や図18-13には、黒色の彩文と赤色のスリップが施される。

ジンナー公園は過去に存在したラウルピンディ刑務所の敷地の一部である

37) 北緯33°36'11.08"、東経73°3'23.13"。ガウル・マンディには、築150~200年とされる古建築群が残る。中にはヒンドゥ教寺院の尖塔らしきものも含まれる。今回の課題とはかわらないが、歴史上重要な土地である。

38) 北緯33°34'9.64"、東経73°4'42.18"。

39) アユーブ公園では、最も標高の高い地点まで行っていないが、最大で標高約537mを記録し、ジンナー公園では標高約519mを記録した。

40) 北緯33°35'4.04"、東経73°4'25.62"。



図17 ラウルペンディ・ジンナー公園内の丘（北西より）（筆者撮影）

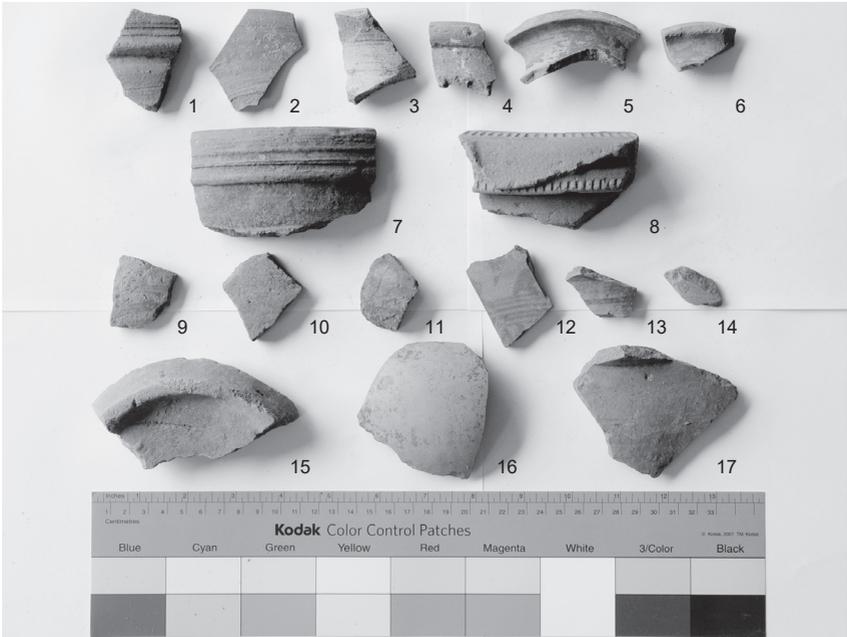


図18 ラウルペンディ・ジンナー公園内の丘周辺表採の土器片 縮尺1/4（筆者撮影）

(Khattak 2012)。カニングム氏はこの刑務所の近くで「アーリア文字」の銘文を持つ灯明皿と、まだらな褐色で彩色された、高さ約6cm、直径約7.5cmの凍石製の蓋付きのコップが出土したことを記録している (Cunningham 1872: 151-152)<sup>41)</sup>。氏によれば、刑務所の建設にあたってその用材を得るために「tope (丘)」が取り壊されたという。今回確認した土器片が表採できる長方形の丘が「tope」の痕跡である可能性、あるいは、「tope」が近隣に存在した可能性が考えられる。

### (3) 踏査の結果から分かること

現地での遺跡踏査で確認したかった点は、①ラワルピンディ中心部から北西約5マイル(約8km)の地点、つまり、現在のイスラマールバードのG11~13区、H11~13区、I11~13区辺りに仏塔址の痕跡が残存するかどうか、②ラワルピンディ市中心部に都市址の痕跡が残存するかどうか、③ラワルピンディ市中心部から南東に仏塔址の痕跡が残存するかどうか、の3つであった。

①にかかわっては、G12区において紀元前に遡る時期の土器を表採できる地点を確認し、G13区においてタキシラの語が意味する「石室」や「トカゲ石」にかかわりうる巨岩の構造物を確認し、I11区において紀元前以来、1000年以上の長期に渡って人々が活動した遺跡を確認し、I12区においてやはり長期に渡る期間の土器片を表採した。表採した土器は、玄奘の訪問した7世紀頃にもこれらの地点において人々が活動していた可能性が高いことを示す。ただし、明確に仏塔の址と分かる場所を確認することはできなかった。

②にかかわっては、軍事施設が多いというラワルピンディ市の特殊な事情から、満足に現地で遺跡の確認作業をおこなうことはできず、玄奘の時代ないしそれより古い時代の痕跡を確認することはできなかった。そもそも、市内では開発が進み、ほとんどの地点の地表が家屋やコンクリートで覆われ、地表および地下の情報を得ることは困難な状況にある。ただし、「レースコース公園」では、少なくとも19世紀半ばのカニングム氏の訪問時以降に大きな開発はお

41) なお、ハタック氏 (Khattak 2012) は刑務所が1882年に建設されたと説明するが、それではカニングム氏の時代に刑務所が存在したとする記録との間に矛盾をきたす。

こなわれていないように見受けられ、地中に遺跡が残される可能性がある。

③にかかわっては、アユーブ公園の丘陵の北側にあるジンナー公園内で古い時代の土器片が散らばる丘を確認した。土器片はやはり、長い時間幅をもってこの周辺で人々が活動していたことを示す。アユーブ公園の丘陵の北に立地する点は、玄奘の「城外の南東にある南山の北側（城外東南南山之陰）」に仏塔があったとする説明と符合するようで興味深い。こちらにおいても、仏塔自体の痕跡を探り当てることはできなかった。

今回の踏査により、これまで遺跡の存在が認められていなかったイスラマーバード市からラウルピンディ市に跨がる範囲の複数箇所で古代の人々の活動の痕跡を見いだした。探索の対象とした特定の仏塔址自体の痕跡を探し当てることはできなかったが、仏塔址があったのではないかと想定した一帯において、古代の、それも玄奘の時代を跨ぐような年代幅を持つ土器片を伴って、人々の活動痕跡が見いだされた意義は大きい<sup>42)</sup>。

## おわりに

玄奘の時代、つまり7世紀前半頃のタキシラの中心地はポトハール高原の、

42) 今回の渡航中に、ラウルピンディ市中心部より北西方約40kmにあるハサン・アブダル (Hasan Abdal) を訪問した。そこには、カニンガム氏が玄奘の言うエラーパツラ竜王池に相当すると考えた地点がある (Cunningham 1872: 135-136)。シーク教寺院グルドワラ・パンジャ・サヒブ (Gurdwara Panja Sahib) である (図1、北緯33°49'15.16"、東経72°41'23.03")。今回設定した課題には直接かかわらないが、玄奘の記録したタキシラの地理的な関係を把握する上で不可欠の存在であるため、ここに踏査記を付す。

シーク教寺院建築の東半分は池に囲まれる。その東部に水の湧く地点があり、その湧水箇所には手形が刻まれた石が置かれている。シーク教徒の間に伝わる伝説によれば、教祖バーバ・ナーナク (Bāba Nānak) の残した手形であるとされ、カニンガム氏はその伝説の淵源を仏教説話に求めている (Cunningham 1872: 137-138)。その湧水点を含め、池全体に、体長30~50cmで黄色がかかった灰色を呈する、鯉のような淡水魚が泳ぎ回る。

寺院の敷地の東隣には、イスラム教徒の墓があり、ハキマ (Hakima) とララ・ルフ (Lala Rukh) の墓と呼ばれる。カニンガム氏がムガル皇帝のイトスギ庭園 (Cypress Garden) と記録した場所であり、彼が残した絵図の中の、指示書きが抜け落ちた「a」「b」「c」地点がここに対応すると思われる (Cunningham 1872: 138, Pl. LX)。敷地の西端の入り口の北側にも沐浴場があり、こちらでも上述の魚が泳ぎ回る。道を挟んで北隣に丘があり、そこでカニンガム氏が仏塔を見つけたが、現在では跡形も無くなっているという説明を現地で受けた。氏は僧院と大きな仏塔があったことを記録しており、絵図の中の「A」がそれに対応すると思われる。氏によれば、その東方240m (800フィート) と、さらにその南方にも、切石と土器片で覆われた丘があったという (「B」「C」地点か)。

現在のラワルピンディ市あたりにあったのではないかと、とするのが前稿で唱えた仮説であった。「タキシラ遺跡群」ではビール・マウンド、カッチャー・コート (Kacchā Kot)、シルカップ、シルスフの各地点で都市址が知られており、これらがこの順で、ある期間にタキシラを中心都市であったことは疑いない。もし前稿の仮説が立証される場合、2世紀頃のクシャーン朝の時代に「タキシラ遺跡群」に建設されたシルスフ都市址がある段階で廃絶した後、都市機能がマールガラ丘陵を越えて大きく南へ移転させられたことになる。ポトハール高原を訪問し、遺跡を探して回ればこの課題は解決されるのではないかと期待した。しかしながら、問題の解決はそれ程簡単なものではなかった。

まず、今回の踏査の過程では、土器片の散布を認めるものの、遺跡の痕跡を見いだすことのできなかつた地点が複数存在した。土器片が散らばっていても、土地の開発に際して重機等で遺跡が破壊され痕跡が残されていない場合、元あった遺跡の性格を知ることは困難である。その点において、近年 III 区で確認された丘は、遺跡としての状態が保たれており、貴重である。ただし、この場合においても、現段階では遺跡の性格を知ることはできない。遺跡がどのような性格をもつものであったかを知るためには、結局のところ、発掘を含めた大規模な現地調査が必要となる。

今回イスラーマーバード G13 区で確認したトカゲ岩は、タキシラの語源にかかわって重要な存在である可能性を秘める。つまり、トカゲ岩やそれが作る石室状の構造物が語源となって、同地が「トカゲ石」や「石室」を意味する「タキシラ」と呼ばれるようになった可能性が考えられる。想像をたくましくすれば、その語がいつからか、「石切り」と解釈されるようになり、さらには「頭切り」という物騒な意味を表すとも認識されるようになり、求められるままに自身の頭をバラモンに布施したチャンドラプラバ王の伝説と結びつけられたのかもしれない。その伝説の場所を記念するために、岩の近辺にマウリヤ朝のアショーカが建てた仏塔が、玄奘の時代まで伝わっていた「捨頭塔」なのかもしれない。とはいえ、以上の話は現段階では空想の域にとどまる。今回の踏査時に表採した土器片の中に、古代にまで遡る資料を確認していないためである。物質資料の検討に基礎を置く本研究において、物的証拠のないまま論を進

めることは控えたい。今回確認したトカゲ岩がいつから人々によって使用されたかについても、結局は周辺の発掘を待たなければ判断できない。もしトカゲ岩周辺が今後発掘され、紀元前に遡るような資料が見つければ、同地の重要性が明らかになるだろう。

玄奘の時代のタキシラ都城があったと想定したラワルピンディ市の中心部においては、軍事施設が多数存在することにより、満足に遺跡の確認調査を実施できなかった。一方で、ラワルピンディ市東南部にあるジンナー公園においては、長方形に整形された丘と周辺に散らばる土器片を確認した。この長方形の丘が古代に遡るものであるか、そして、そうであればどのような性格を持ったものであったかの解明についても、発掘調査を待たなければならない。

前稿で掲げた課題の解決に向けて、まだまだ道のりは長い。ただし、今回の渡航により、研究の前進は認められた。前稿で遺跡が存在するのではないかと仮定した地点の周辺で、確かに古代の人々が活動した痕跡を見いだしたのである。課題の解決に向けて、発掘調査の実施が待たれる<sup>43)</sup>。

## 謝辞

パキスタンにおける2023年度の遺跡踏査に際しては、パキスタン連邦政府考古学・博物館局 (Department of Archaeology and Museums, Federal Government of Pakistan) のアブドゥル・ガフル・ロン (Abdul Ghafoor Lone) 氏およびアルシャッド・ウッラー (Arshad Ullah) 氏に多大な便宜を図っていただいた。また、2019年度の現地調査の頃より、京都大学名誉教授の増井正哉先生には調査の実施にかかわる様々な面で相談に乗っていただいている。上記の方々感謝申し上げる。なお、本稿は日本学術振興会・科学研究費22K00973 (基盤研究(C)「西北インド出土仏教碑銘の考古学的研究」、研究代表者：内記理) および日本学術振興会・科学研究費22K00985 (基盤研究(C)「都市化」とは何か」、研究代表者：伊藤淳史) の成果の一部である。

43) 今回訪れた地点の中で比較的発掘調査に適していると考えられるのは、イスラマールバード III 区に所在する墓地丘である。西部より着手され始めている開発で崩された丘の断面には石積遺構が現れており、発掘すれば成果が上がるということが明らかな遺跡である。丘の周辺の住宅地にも土器片が散らばっている状況であり、すでに丘の周辺にあった遺構を含め、遺跡が壊されつつあることは明らかである。保護に向けた対策が求められる。

## 参考文献

- 大牟田章（訳注）1996『フラウィオス・アッリアノス アレクサンドロス東征記およびイン  
ド誌』本文篇 東海大学出版会。
- 桑山正進（訳注）1987『大唐西域記』大乘仏典中国・日本篇9、中央公論社。
- 桑山正進1990『カーピシー・ガンダーラ史研究』京都大学人文科学研究所。
- 定方晟1998『異端のインド』東海大学出版会。
- 内記理2022「玄奘が見たタキシラの都城と仏塔」『オリエント』64-2、217-232。
- 長澤和俊（訳注）1996『法顕伝』雄山閣。
- 中村了昭（訳注）2013『新訳 ラーマヤナ』7、東洋文庫。
- 西川幸治（編）1994/2011『ラニガト——ガンダーラ仏教遺跡の総合調査1983-1992』京都  
大学学術調査隊報告書、京都大学学術出版会。
- 平岡聡（訳註）2007『ブッダが謎解く三世の物語——『ディヴィヤ・アヴァダーナ』全訳』  
上、大蔵出版。
- 水谷真成（訳注）1971『大唐西域記』中国古典文学大系22、平凡社。
- 水野清一編1962『ハイバクとカシュミルスマスト——アフガニスタンとパキスタンにおけ  
る石窟寺院の調査1960』京都大学。
- 山際素男（訳注）1992『マハーバーラタ』第1巻、三一書房。
- 山崎元一1979『アショーク王伝説の研究』春秋社。
- Bahadar Khan et al. 2002, *Bhir Mound: The First City of Taxila (Excavations Report 1998-2002)*,  
Lahore.
- Cunningham, A. 1871, *The Ancient Geography of India*, London.
- Cunningham, A. 1872, *Four Reports Made during the Years 1862-63-64-65*, New Delhi.
- Errington, E. & V. S. Curtis 2007, *From Persepolis to the Punjab: Exploring ancient Iran, Afghanistan  
and Pakistan*, London.
- Ghafoor Lone, A. et al. 2017, Preliminary Report: Excavation of the Buddhist Stupa at Ban Faqiran-  
Islamabad, *Pakistan Archaeology* 32, 51-100.
- Ghosh, A. 1948, Taxila (Sirkap), 1944-5, *Ancient India* 4, 41-84.
- Khattak, I. 2012, Jinnah Park- a bone of contention, DAWN, 2012年9月7日記事 [https://www.  
dawn.com/news/747658/jinnah-park-a-bone-of-contention-2](https://www.dawn.com/news/747658/jinnah-park-a-bone-of-contention-2)（最終閲覧日：2023年10月31日）
- Lüders, H. 1942, Von Indischen Tieren, *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 96,  
23-81.
- Marshall, J. 1951, *Taxila*, 3 vols. Cambridge.
- Salomon, R. 2005, The Name of Taxila, *East and West* 55-1-4, 265-277.